

## トータルな英語力が身につく英字新聞の 読み方（第二回）

Read English paper and improve your English (2)

野 呂 一 郎

---

## トータルな英語力が身につく英字新聞の読み方（第二回）

野 呂 一 郎

---

### 二部構成の紙面

第二回目の今回は、ウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版（現在はThe Wall Street Journalにすべての国際版が名前を統一）の紙面構成を中心に解説をしていきます。現在（2008年1月現在）の紙面構成は、若干変わっている部分もありますが、世界を代表する経済紙のコンセプトを紹介するために、あえて旧版のThe Wall Street Journalの紙面を紹介します。このウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版は通常2部構成になっています。ひとつはフロントページにThe Asian Wall Street Journalというタイトルのあるもので、いわば本紙でありこれはSection1と呼ばれています。もうひとつはフロントページのタイトルがMoney&Investingとあり、アジア・太平洋地域の市況に関する情報が満載の、投資家向け別紙ともいうべきもので、これはSection2と呼ばれます。

### 一面の中国関係記事は常にスクープの連続

本紙Section1のフロントページ、第一面をご覧ください。

一面左上にはColumn Oneが定位置をしめています。この位置は新聞でもっとも目に付くポジションであり、ここに書かれる記事はその日のメイン記事です。Column Oneはアジアと世界の経済に関するリアルタイムのトピック、トレンドを取り上げ、ウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版独自の洞察を加えています。Column Oneの右となりにあるのが、What's Newsです。この欄はその日の最も重要な政治、経済ニュースをコンパクトにまとめたものであり、時間のないときはこの欄に目を通すだけでもいいでしょう。2分で世界の最新政治、経済ニュースがわかります。一面にあるその他のニュースは、当然編集部が最も力を入れて読者に送る内容であり、アジアでビジネスに携わる人であれば、誰でも必読のコラムといえます。現在は中国関連の記事が一面を飾ることが非常に多くなってきています。ウォールストリートジャーナルアジア国際版の大きな魅力と特徴のひとつは、この中国のリアルタイムの重要情報をもれなく、そして独自の強力な取材網でカバーし、グローバルな視点で客観的な分析をしていることです。

### アジア全域の政治・経済を強力にカバー

フロントページをめくって頂くと、A2、A3ページには通常、Asian-Pacific Newsという欄があ

ります。この見開きページではアジア・太平洋圏つまり日本、中国、東南アジア、オーストラリア、ニュージーランドといった諸国の政府の重要な意思決定と、同地域の主要な企業の重要な動きが、毎日報じられています。日本の政治、経済に関する最新ニュースは通常この欄に掲載されます。2005年4月6日号では、日本の教科書問題がアジアで再燃し、中国韓国の戦争犠牲者の怒りに火をつけたと報じています。再びページを繰って頂くと、A4からA6ページあたりまではInternational News欄が続きます。このコーナーは欧米の企業・経済・政治に関する最新の国際ニュースを扱っています。更に本紙を読み進めると、NETWORKING欄がお目見えします。毎日掲載されるこの欄は、副題にTechnology・Management&Marketingとあるように、グローバル企業のテクノロジー、マネジメント、マーケティングに関する最先端の動きが毎日網羅されています。紙面の最後を飾るのが、Opinion（社説、識者・読者の声）欄です。このページのメインはReview&Outlookというタイトルで書かれている社説と、内外の有識者、特に各国の政治、経済の動向を握るキーパーソンの意見です。

別紙Section2は、タイトルにMoney&Investingとあるように、文字通り投資家向けに資産運用に関する包括的な情報を提供することがポイントです。

### 読み飛ばす記事が見つからないウォールストリートジャーナルアジア国際版

さて、駆け足でざっと紙面の紹介をしてきましたが、読者の皆様は、「どれも重要そうじゃないか？じゃあいったいどこを読めばいいんだ？全部読めというのか？」とおっしゃられることでしょう。実ははっきり申し上げれば、全部読まれたほうがいい。

なぜなら、たとえば、International News欄ですが、読者の皆様はウォールストリート・ジャーナル紙はアメリカの経済紙だから、こういう欄は弱いだろう、どうせロイターとかの借りてきた記事で埋めているんだろう、と思われるかもしれませんが、そもそもNewsとあるから、単なるfactだけでウォールストリート・ジャーナルらしい鋭い分析などないはずだ、だから読み飛ばしてもいいな、このようにお考えかもしれません。しかし、トップページの後の目立たないこの位置にあるこの欄こそ、ある意味でウォールストリート・ジャーナル紙の真骨頂とも言えるページなのです。例えば、2005年4月22日号の本欄にはイギリスの石油大手BPがロシアの油田権益へ手を伸ばしつつも、その道のりが険しいことが報道されていますが、通り一遍のnewsやfactだけでないことは、この記事がモスクワ、ロンドンにそれぞれ派遣されている、二人の特派員の合同レポートであることから十分伺えます。ウォールストリートジャーナルの強さは実にここに 있습니다。どんな小さな記事にも手を抜かない、ということです。というか、世界中に1,650名の記者、編集者が世界中をネットワークして、オリジナルの情報を発信、編集しているわけですから、どの記事もクオリティの高いものにならざるを得ないわけです。どこかの国で当たり前に行われている、記者クラブで発表した政府や大企業の大本営発表を各社そのまま掲載、などの安易な手抜きは、ありえないわけです。

## 世界経済を動かすアメリカ政府の動きにも密着

ウォールストリートジャーナルがグローバル・メディアとして他の追随を許さないのは、実は国際経済だけではなく、各国の最新政治動向の報道、特にアメリカ政府の最新動向についてはめっぽう強く、特にこのInternational News欄でしばしば取り上げられる、アメリカ政府トップ層の国際貿易や、投資に関する最新の見解、それに対しての分析と洞察は国際的に高く評価されています。アメリカの政治動向が、世界経済に与える影響を良くご存知の読者の皆様は、ぜひこの欄に注目を頂きたいと思います。アメリカのみならず、ヨーロッパ諸国の政治経済、EUやIMFといったグローバル経済機構、マイクロソフトやオラクル、MCI、ヒューレットパッカード、ファイザーといったグローバル企業に関する最新動向も満載されているので、グローバルに活躍しているビジネスパーソンならば、このInternational News欄をとばし読みにするわけにはいかないでしょう。

## グローバル経営の明日がわかるNETWORKING欄

一面はウォールストリート・ジャーナル紙が総力を挙げて編集している、世界最高峰のレポートだから、これを読まないわけにはいかない。Asian-Pacific Newsは、ウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版ならではの、オリジナルな主要アジア諸国の最新経済動向が毎日載っているから、これも見逃せない。紙面後半の目玉であるNETWORKING欄は、最新のグローバルな経営動向のレポートのみならず、トレンドが起きている理由や背景にまで踏み込んでおり、世界中の経営者がこぞって注目する、最新のグローバル経済・経営動向です。日本ではほとんど誰も注目しない（というか、ウォールストリートジャーナルアジア国際版の価値がわかっていない）この欄は学問的な価値も大きく、世界中の経営学者の研究や論文のreference（参考）としてよく使われます。記事のタイトルに興味があれば必ずスクラップをして、熟読することを是非おすすめします。そんなわけで、このNETWORKING欄も読まないわけにはいかない。

## 世界中のVIPが寄稿するOpinion欄

本紙最後のページはOpinion欄です。読者の意見くらいとばし読みできるだろう、というと、これもそうはいきません。なぜならば、世界中に大きな影響力を持つ読者たち、すなわち世界のオピニオンリーダー達が、相当な頻度でここに寄稿してくるからです。パウエル前アメリカ政府国務長官（Mr. Powell, former U.S. secretary of state）、クリントン上院議員（Ms. Clinton, democratic senator）、General Electric社の前CEOジャック・ウエルチ氏（Mr. Welch, former CEO of General Electric）、アローヨ現フィリピン大統領（Ms. Arroyo, president of the Republic of the Philippines）、ハワード・オーストラリア首相（Mr. Howard, prime minister of Australia）などこんな超大物が、という世界のビッグネームが奇譚のない見解をぶっつけてきます。このことひとつとっても、いかにウォールストリート・ジャーナル紙が、世界中で大きな信頼と影響力を持つメディアであるかがい知れます。

## 世界中のメディアに引用されるReview and Outlook

しかし、世界中の大物の生の声が聞けることだけが、このOpinion欄を読み飛ばすことのできない理由ではありません。このOpinion欄に掲載されている社説（Review and Outlook）の存在こそ、このページを無視できない最大の理由です。社説は主にアジア・太平洋地域の経済、政治トピックをとりあげ、独自の考察と論評を展開しています。そのクオリティの高さは、世界中のメディアがこぞって、取り上げることから明らかでしょう。ところで、本講座はウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版を読みこなすためのものですが、よい英文を書くためのヒントや技も皆さんにお伝えしていきます。ウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版の社説はその格好の教材にもなるのです。なぜならば、よいライティングの絶対条件とは、Fact（事実）とcomment（意見）を一緒にしない、ということであり、ウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版の社説は、そのお手本とも言えるからです。Section2のMoney&Investmentはアジア・太平洋地域の15市場をグラフで詳細に解説する一方、アメリカ、ヨーロッパの市況についても詳細な統計とデータを提供しています。Money&Investmentが他紙の追随を許さないのは統計やデータの正確さだけではなく、記者の綿密な取材による市場や企業を取り巻く環境変化を、興味深い記事にまとめているところです。それはHeard in Asia（アジアの街の噂）などのコラムをご覧いただければ、よくわかりいただけるはずです。

## 読み方のルールなど実は要らない

おわかりいただけたでしょうか？つまり、結局、どの記事もInformative（インフォーマティブ＝有益な情報満載）であり、truly worth reading（本当の意味で読む価値あり）なのです。

ウォール・ストリート・ジャーナルアジア国際版の読み方講座を始めるにあたり、このことは是非皆様に知って頂かななくてはなりません。つまり、何を読んでも、どこをどう読んでも、それは読者の皆様にとって有益なresource（血肉）となるということです。

## 2005年は二人のピューリッツア賞受賞者が誕生

ピューリッツア賞（Pulitzer Prize）といえば、ジャーナリズム最高の栄誉とされる賞です。世界のジャーナリズムにおけるウォールストリート・ジャーナル紙のクオリティの高さは、これまでに29人の記者がピューリッツア賞に輝いていることから、すでに証明済みです。その賞を今年、またもやウォールストリートジャーナル紙の二人の記者が受賞しました。（本紙4/6/05号報道）受賞者の一人女性記者エミイ・ドクサー・マーカス氏（Amy Dockser Marcus）は増えつつあるガン克服者たちの問題を取り上げ、高まりつつあるガンの生還者に対する心身両面でのニーズにスポット当てた連載でこの賞を受賞しました。もう一人の受賞者ジョー・モーゲンスターン氏（Joe Morgenstern）は、その優れた映画評論で批評部門（criticism）のピューリッツア賞を受賞しています。これで、ウォールストリート・ジャーナル紙のピューリッツア賞受賞者は累計31人となりました。この数は世界のジャーナリズム界の金字塔といえるでしょう。特筆すべきことは、ウォール

ストリート・ジャーナル紙は過去においても世界トップレベルのメディアであったのみならず、現在もそのレベルと質を維持しているということです。今回新たに二人のピューリッツア賞受賞者を輩出したことが、このことを雄弁に物語っています。読者の皆様は、是非自分の目でこのウォールストリート・ジャーナルというメディアのすばらしさを実感して頂きたいと思います。紙幅の関係で触れませんでした、ウォールストリートジャーナルアジア国際版には、週一ベースで、レジャーや実用情報が満載のWeekend Journal, キャリア情報や仕事に役立つ情報が満載のPersonal Journalも皆様のお手元に届きます。これらについては、また別の機会に触れたいと思います。

次回、第3回目はいよいよ、読み方の実践編にはいります。